

第九章 中世・近世イングランドの商業化

— 都市史の視点 —

川名 洋

一 商業とアーバン・プロセス

経済史の主要な研究課題は、経済発展と社会変革との間で起こる相互作用の先例を歴史の舞台に再現し、その現代的意味を明らかにすることである。物質の豊かさに価値を見出す経済とモラルやアイデンティティに重きを置く社会とを同じ脚本で扱うのは容易でないが、この難題を解く鍵は都市史の中に隠されている。経済拠点でありながら先を行く制度と独特の文化が芽生える都市の歴史に、商業の勢いを見出す研究の層はとりわけ厚い。そこで本稿では、諸研究の論旨を踏まえ、商業化をテーマに経済と社会とを一括りにして歴史を評する都市史学の有効性を探りたい⁽¹⁾。

一六世紀半ば以降、それまでヨーロッパ諸国との取引で栄えたイングランドでは、さらにアジアをはじめ新たな貿易ルートの開拓に公私の力が注ぎ込まれることになる。一方、同国内では、余剰労働力を駆使し消費財生産を旨論む政府の経済政策が実施され、生活水準向上への期待とともに消費と労働の意欲も高まっていく⁽²⁾。ここに近世特有の歴史的コンテクストが準備されることになる。この時代の後半には、それまでの余暇志向に代わり物質的豊かさを

求めて世帯収入の最大化を目指す新たな労働観が広まる「勤勉革命」という波が打ち寄せ、広告操作によりファッションが作り出され、大衆の社会的模倣と衝動的消費行動が刺激される「消費革命」という別の波と重なり合う⁽³⁾。しかも同じ頃、膨張する軍事費を賄うため有力商人層からの長期借入を可能にした公債発行に端を発し、不動産所有と並んで証券取引による蓄財の可能性がさらに広がる。この「財政革命」によって大規模な信用創造が可能になり金融の近代化も動き始めた⁽⁴⁾。かくして、商業資本主義の土壌は産業革命期に向かって確実に肥沃になっていったのである。

こうした流れに物流と消費が盛んな要地の存在価値が浮上することは容易に想像がつく。とくに多種商品の提供や金融サービスへの渴望が目に見えて明らかになったのは、首都ロンドンをはじめ地方に散在する大小の都市においてであった。常に耳目を引くロンドンに加え、一七世紀半ば以降、地方都市の人口増加もそれまで以上に際立つようになる。この都市人口増と相まって、経済面では貿易や国内商業の伸長を背景に製造業の新たな中心地が生まれ、また、社交と衝動的消費の場として伸びるリゾート都市や、国際取引の要衝となる海(河)港都市の成長が目立つようになった⁽⁵⁾。

地方都市の経済が潤う過程で勢いよく芽吹いたのは、社会の改良を謳い啓蒙思想を実践に移す都市民独自の文化 *public life* であった。例えば、コーヒーハウスに代表される非公式な政治空間が生まれ、より組織的な集いの場としてヴォランティア・アソシエーションの数は急増し、洗練された建築様式の浸透、上品な生活環境やスタイルの創出も随所に見られるようになる。つまり、都市史の視点が注目されるのは、主に物質的豊かさを模索する経済の論理と、カルチャーの発展という社会の論理とが相互に影響し合い融合していく様子を浮かび上がらせ吟味することによって、商いと消費が活発化する近世という時代の歴史的意味をさらに積極的に論じることができるようになるからである。

都市の人々は、商業化という糸をつむぎ、地縁・血縁を超えた政治的・社会的関係とともに生活の中へと織り込ん